

平成 27 (2015) 年度 学位請求論文 (課程博士)

在日ブラジル人とキリスト教についての研究

論文要旨

大正大学大学院文学研究科宗教学専攻 研究生

星野 壮

本論における最大の目的は、端的に表現すれば、現代日本における外国人、特に在日ブラジル人に焦点をあて、彼／彼女らと密接に関わる宗教集団、および彼／彼女らが自ら立ち上げていった宗教運動に着目し、特に日本で形成される「共同体」としての側面に注視して、その実態を明らかにすることである。

1990年の「入管法」改正以降、最も多かった時期（2007～2008年）では、30万人以上の在日ブラジル人が日本に暮らしていた。わずか20年でこれだけの外国人人口の増加というのは、相当なインパクトを持って受け入れられたのであろう。ブラジル人を中心とする南米系日系人（とその家族）に対しての施策が各自治体で進んだ。それを後追いするように、調査、研究が進んだ。

しかしながら集住地においてすら、在日ブラジル人の宗教活動に寄せられる関心は、その生活世界に寄せられるもの以上に無視、もしくは不安視といった類のものである。そしてさらに残念ながら、そこでは宗教について研究されることは少なく、諸分野における有力な先行研究でも、わずかに触れられる程度であった。しかしながら、その重要性については、多くの研究者が認めていたように見受けられる。

他方、日本の宗教学・宗教社会学分野では、戦前から戦後にかけての日本の海外進出や移住にともなって移動した日系宗教について、井上順孝・中牧弘允・渡辺雅子・寺田喜朗らによる研究が存在し、そして戦前から日本に在住する在日コリアンについての飯田剛史の研究、谷富夫の研究などが存在する。いずれも優れた調査・研究であるが、当地における「歴史化」の進展、すなわち受容・展開、そして停滞を分析するための時間的経過が、本論で取り上げる教団や信徒とは大きく異なってしまう。

そのような事情を踏まえて、本論では採用する分析視角として、宗教社会学者の森岡清美・西山茂による「土着化」論、同じくマクファーランドの「気密室」論、井上順孝の「魔法瓶効果」論などをベースに据えながらも、社会学分野で在日ブラジル人研究における有力な先行研究とされてきた広田康生の論を参照し、「越境者—共振者モデル」を提示した。端的に言えば広田の論に従いながら、「エスニック・ネットワーク」を「越境者」単独で形成するものではなく、ホスト国の協力者である「共振者」とともに構築していくものとして捉えながら、その構築される「場所」や各アクターの析出をはかることによって、比較研究を可能にする視座である。このモデルによって、本論で取り上げる宗教集団が形成するコミュニティを分析していくことになる。

1章にて先行研究や各種新聞記事などを参照しながら、在日ブラジル人の「歴史」について記述した。その中で筆者は、1章の掉尾にて、ゴードンの「エスクラス」という議論が在日ブラジル人たちに適応的であるとする梶田らの意見によった。エスクラスとは、ある国の社会を構成する特定のエスニシティが、特定の階層に集中することである。在日ブラジル人の場合、東海や北関東という特定地域の重工業の下請け労働者層に固定化され、相互扶助のネットワーク資源がきわめて限定的であるとされる。そしてその特徴が脆弱性となって露呈したのが2008年後半以降の不況時であった。もともと移民はエスクラス化しやすいのは間違いないのであるが、EUなどとの比較によっても、特定業種への依存度が高いという在日ブラジル人の特徴が析出された。

そのような在日ブラジル人も、よりエスクラスを細分化していくと3層程度に分けることも可能である。最上層にはエスクラスからの離脱をはかろうとする企業家層があり、中間層にアソシエーション活動層があり、残りがビジネス消費層として存在するのが、在日

ブラジル人の階層構造である（前者の方が少ないと見積もられている）。日本への移動を経て、現状ではこのエスクラス化（ある意味均一化）した人びとが、宗教に通うという実情を踏まえておきたい。

2章と3章では、カトリック教会と在日ブラジル人をめぐる諸問題について論じた。2章では、主にカトリック教会側からの司牧・支援の過程を描きだした。1990年の「入管法」改正直後から各教会や関係者が支援を開始していたこと、そういった初期からの支援を可能とさせたのは、インドシナ難民やフィリピン人女性への支援との連続性、といえるだろう。しかしながら、現在に至るまで、各所・各アクターによる支援経験が他の地域にまで十分に拡充していかない様子も看取できた。

とはいえ、90年代中葉に用意された教区レベルでの支援・司牧を管轄する組織（オープンハウスなど）が2000年代になると、ようやく各小教区に浸透していき、教区単位では、司牧・支援の一元化がはかれるようになっていった。ただし2000年代からは、在日ブラジル人たちに「自立性」とも「排他性」とも表現できるような、（フェスタ・ジュニーナやカリスマ刷新運動といった）自発的な運動が見られるようになり、それらにいかに対処するか、といった問題を抱え始めた。

2008年後半以降、すなわち不況到来後は、各教会ともに在日ブラジル人信徒の減少が見られる。しかしながら、それは信徒共同体同士の統合・連携、もしくは日本語ミサへの出席といった兆候がみられる契機となっていることも確かである。これらの変化は、小教区・教区といったカトリック教会側、また日本人信徒側にとっては好適のものであると考えられるとした。

3章では、そのような運動を梃として愛知県下のカトリック教会にて、信徒共同体を形作る在日ブラジル人信徒たちの姿を描いた。豊橋の周囲にポルトガル語ミサが行われるような大きなカトリック教会がないため、豊橋教会に地域の信徒たちは集中していく。そのような信徒たちの中から、信徒共同体が立ち上がり、やがて在日ブラジル人社会において最大といわれるフェスタ・ジュニーナを開くまでに至った。

一方西三河の共同体は、各教会での共同体を形成しつつ、各教会の地理的近さ、またリーマン・ショック後の信徒減少などの影響を受けて、各教会の共同体が連携するようになった。さらに近年三重県にあった、カリスマ刷新運動共同体のLG共同体日本支部が西三河に場所を移しつつあり、それを連携した共同体全体で受け入れるような形を取っている。カリスマ刷新共同体では、SNSなどを用いて、ブラジル本部での情報が共有され、また日本における在日ブラジル人の信仰から生活一般まで、ブラジル本部にいる創設者たちに伝えられ、それに合わせた布教が日本にもたらされ、日本でなされている。結果的に熱心な信徒層が西三河に集まるようになり、他集住地域の熱心な信徒が西三河に流入するような状況も生まれる。そして凝集力の強いカトリック教会における信徒共同体が現出している。

また愛知県における日本人信徒の特性も指摘しておく必要がある。なぜならば、愛知県下のカトリック教会信徒の多くが、高度経済成長期にトヨタやその関連企業に就職するため、長崎から出てきた国内移民たちと、その配偶者・家族であるからだ。彼／彼女らが意識せずとも、多くの司牧者はそこに、日本人信徒と在日ブラジル人信徒の類似性―「トヨタイズムによる移民」同士―を認め、それが「コンタクト・ゾーン」における紐帯を生成させる上で、重要な要素として下支えしていると考えている。日本人信徒たちの中には、さほど自覚的でない者も存在する。しかしきわめて自覚的にそれを訴え、在日ブラジル人含め

て外国人に繋がろうとする信徒たちがいることも、また確かである。

一転して4章では、エスニック・チャーチの代表格ともいえる、ブラジル系ペンテコステ派教会と心霊主義センターについて記述した。ペンテコステ派M教会は、自身もデカセギであったブラジル人たちが作り上げた教会であり、今やブラジルに逆輸入されるまでに成長した。セル・グループ、教会、そして教団全体という異なった単位で頻りに集会を行い、ユースカルチャーに近接した行事なども行われ、凝集力が強いことが特徴として挙げられる。

同じエスニック・チャーチでも、より私秘的なサークルを形成しがちであるのが、心霊主義である。その中でも最大規模を誇るのが、イノウエたちのセンターである。1993年に開設されたセンターは、場所を求めて愛知から岐阜に移転し、カルデシズモだけではなくウンバンダすら行うようになっていく過程でメンバーを増やし、心霊主義センターとしては例外的に、200人程度のメンバーを抱える大きなセンターとなった。複数の宗教文化が混雑した末に生まれた、その信念体系もきわめて興味深く、「進化論」的スキームをも感じさせる。輪廻転生などを特徴とした教えの中には、信仰を守り、行うだけではなく、現世での慈善事業といった実践も必要とされる。この実践の中で、日本人ホームレスを「共振者」として獲得し、センターの運営を円滑化させている。

さて、このようなエスニック・チャーチが信徒たちに植え付けようとするメンタリティは、ホスト社会に対して単純に対抗的なメンタリティではない。リーマン・ショック後、優位となった帰国フェーズの最中においても、教団維持のためには信徒を帰国させないようにすることが最重要課題として存在している。よって「対抗的でありつつも日本にいるための意味の創出を行う」必要がある。

ここに意味創出のために動員される教義的要素の差異がきわめて興味深い。ペンテコステ派M教会におけるさまざまな実践は、日本社会における種々の剥奪を埋めあわせている。そしてそこではむしろ日本社会を救済するという肯定的な意味づけが、自身の救済に繋がっている、という見解があった。筆者は、M教会創始者へのインタビューなどを通じて、この傾向が東日本大震災と原発事故を経て、さらに帰国フェーズに傾斜する中においても、その日本に対する斥力を打ち消すように意味づけを試みていた。実際に被災地である東北に何度となくM教会の有志は訪問し、中には一年以上住み込んで活動するものまで出てきたのである。

それに対して、心霊主義センターはイノウエによって「輪廻転生」によった言明がなされる。すなわち在日ブラジル人の多くは、①前世日本にて生を受けた経験を持つ、②その前世にてキリシタン迫害に荷担した、③その罪のため、日本に来て、今度はキリストの教え(=心霊主義)を広める使命を生まれながらに担っている、という論理である。このように震災・原発事故後においてもなお滞在し、信仰しなければいけないというメンタリティを、一方は肯定感を強調し、それを使命感へと昇華させる形で、他方は贖罪を強調し、それを同じく使命感へと転換させる形で成立せしめていた。

第5章では、社会関係資本概念によりながら、リーマン・ショック後の豊橋市において、宗教集団が、非宗教的グループ(「グループP」)を介して、教団間協力を実現しつつ、同時に行政や市民団体が行うとされてきた「多文化共生」施策に参画していった過程を考察した。パットナムによれば、社会関係資本は、①緊密なネットワーク内に蓄積されるもの(結束型社会関係資本)と②集団間を架橋する時に蓄積されるもの(橋渡し型社会関係資本)

本)の2種類が存在するが、パートによればこの2種は相補的に機能するという。この2種の社会関係資本が駆使され、2008年後半からの「物資援助プロジェクト」が行われたのである。

つまり緊密な集団であり、エスクラスたる在日ブラジル人の困窮層に寄り添ってきた各宗教集団が①タイプの社会関係資本を保持しているとすれば、グループPは企業家コミュニティらしく、在日ブラジル人社会内を縦横無尽にネットワークキングすることに長け、②のような社会関係資本を蓄積している。不況時に自治体行政や市民活動団体とともに市役所にて会議に参加した宗教集団の代表者たちは、グループPの副代表であるG氏からこのプロジェクト実行を持ちかけられ、ほぼすべての教団が参画することになった。そして①と②の社会関係資本の相補性が、現実の支援策が挙行される際に機能したのであった。つまり企業家コミュニティで自治体行政や日本人市民との繋がりを持つグループPは、自身もつ「ブリッジ」を生かして物資を募集し、受け皿となった。そして集積された物資を各教団に配布した。そして配布された物資を在日ブラジル人ほか、困窮する人びとへの分配する役割を宗教集団が受け持ったのである。

不況下にて困窮する人びとに対しての実効的な影響もさることながら、実現性が低いと考えられていた教団間の協力が非宗教的セクターのブリッジングによって果たされたこと、行政や市民団体が行ってきたとされる「多文化共生」施策に間接的ながら宗教集団が参加可能であること、つまり日本人から「顔の見えない」領域に属していた宗教集団がもつ、日本人側からみれば「埋没」していた資源の動員がはかられたことなどが、本章で得られた主な知見である。

リーマン・ショック後の日本において、在日ブラジル人信徒に関わる教団と彼／彼女ら自身の今後について考察をめぐらせることは、本論を通じたテーマではある。そして現在の様相から推察される今後については、各章ごとにまとめている。それらとは別に、本章ではリーマン・ショック後に起きた急激なエスニック諸資源の退潮傾向の中で、オルタナティブといえる選択を採る信徒や教団の姿を追ったのが、6章である。

エスニック諸資源の退潮の中で、もっとも厳しい状況に置かれたのが日本のブラジル人学校である。つまりその財源を在日ブラジル人からの月謝によっていたブラジル人学校では、支払い能力を喪失した家庭が急増することによって、多くの学生が退学せざるをえなくなり、結果として財政難に陥ったのである。この退潮は、好況時ですら「子弟の不就学問題」に揺れていた在日ブラジル人の教育環境に、さらなる悪化をもたらした。

移民第二世代のホスト社会の適応は、移民研究にて広く明らかにされてきた事実である。ただし在日ブラジル人の場合、このような苦境に日本社会から提供できる環境は公立学校のみであるし、さらに公立学校への編入を後押しする施策などの存在もあって、想像以上に事態の進展が早いとも予想されている。すなわち井上順孝が考察した、世代が下ることによって生まれる言語にかかわる「経年的世代的変容」に関わる問題と、それに付随して生起する「教えの真正性」の問題が、より早い時期から表出するのではないかと予測される。

上記のような事態に際して、日本人福音派L教会では、従来から設置されていた「教会内教会」とも捉えられるポルトガル語部会から、L教会の日本語集会に参加するようになった在日ブラジル人家族の姿があった。まずL教会内の教会ともいえる、ロベルト牧師による教会の存立形態は、前身の教団が「宗教市場」の中で分裂・独立などを繰り返したこと

を、ロベルト牧師が重く顧みたとところからはじまった。聖堂の確保など、他のトラブル要因に影響される可能性も低くなる。こういったメリットを踏まえると日本の福音派教会内に収まっていく戦略を採用する教団も、今後見られるだろう。また日本語集会に参加するようになったヤマザキの家族は、移民第二世代である「子弟のモノリンガル化」が、家族全体の宗教選択の鍵となった。その際にL教会ならば、ロベルトの教会内教会も存在するため、部会を移動するだけで「エスニックな空間」を享受することができるのである。

イノウエ（に憑依したドクトル・ロマノ）によって承認されたブランチの中に、モリが指導者を務める三重県鈴鹿市のブランチがある。モリは彼女いわく「霊の進化」が足りないため、霊媒としての能力が発揮できないのであるが、毎週勉強会やパッセを複数回行っている。そこで子どもたちに教理教育を行っているのがサトウである。自身の子どもの治癒目的でモリのもとを訪れたサトウは、熱心さを買われモリによって子どもたちの指導係に任命された。多くの子どもが日本語の方が得意であること、また宗教的・文化的知識ともに欠落していることから、両言語にて以上のことを説明していた。

上記のような事例を通じて判明することは、ペンテコステ派教会の場合、信徒側に教会を変えることに抵抗感が少ないことなどから、（ブラジル系教会とつながりを持つ教会を中心に）日本人教会への転入が進む可能性があることだ。また教団側もそのような動向に歩調を合わせて、日本の福音派教会との連携が模索できる状況にある。

他方心霊主義センターにとって、経年的世代的要因による変化は、センターにとって死活問題である。また日本において、在日ブラジル人を受け入れるような心霊主義の宗教集団が見当たらない現状では、教団を離れることは、すなわち棄教することを意味する。よって教団が日本語を取り入れた取り組みを率先して開始し、日本語による教義教育はもちろんのこと、降霊のような儀式ですら日本語とポルトガル語を交えて行うようになるのであった。

以上のような各章における宗教集団が形成するコミュニティを、「越境者—共振者モデル」に照らし合わせて解釈を試みよう。広田が取り上げた、横浜における「沖縄」という共通性の下支えされたコミュニティは、たしかに「エスニック・ネットワーク」を形成するものであった。しかしながら、他の研究者による再調査などにより、その「沖縄」を共通項としたネットワークが不全に陥っている可能性が指摘されている。ところが「カトリズム」や「ペンテコスタリズム」といった共通性は、「越境者」と「共振者」ともに、世代を下っても信仰が継承され続ける、もしくは新規参入者が同様の信仰を持つかぎり、半永久的に紐帯を下支えし続けるだろう。ここにおいて宗教は、閉鎖的なコミュニティを存立させる要素としてだけでなく、ホスト社会との回路を下支えする要素としても機能しうるのであった。

以上のように本論は、未開拓分野であった「在日ブラジル人と宗教」という問題系に対して、まずはその諸経団の実態を明らかにし、ついでホスト社会との関わりをもつ「共同体」としての特質をモデルに従って剔出するものであった。